武蔵野幕屋　日曜聖書講筵

信行一相

――ヤコブ書第2章14～26節――

１９５７年５月12日
小池辰雄

信州伝道談　啓示と恵与　義と愛は一本　魂は絶対的なもの　「神の義」はイエス・キリスト
満たされながら展開していく　代贖と代罰　神との信愛関係　上から聖霊の生命が入って来る
観念信仰　信仰から発している行為　信は霊魂の転換という内的根源行為　言行信一如　東洋
的日本的な把握　「ギルガル」（引っくり返り）　祈り

【ヤコブ2】

14わが兄弟よ、人みずから信仰ありと言いて、もし行為なくば何の益かあらん、かかる信仰は彼を救い得んや。15もし兄弟或は姉妹、裸体にて日用の食物に乏しからんとき、16汝等のうち、或人これに『安らかにして往け、温かなれ、飽くことを得よ』といいて体に無くてならぬ物を与えずば、何の益かあらん。17斯くのごとく信仰もし行為なくば、死にたる者なり。18人もまた言わん『なんじ信仰あり、われ行為あり、汝の行為なき信仰を我に示せ、我わが行為によりて信仰を汝に示さん』と。19なんじ神は唯一なりと信ずるか、かく信ずるは善し、悪鬼も亦信じて慄けり。20ああ虚しき人よ、なんじ行為なき信仰の徒然なるを知らんと欲するか。21我らの父アブラハムはその子イサクを祭壇に献げしとき、行為によりて義とせられたるに非ずや。22なんじ見るべし、その信仰、行為と共にはたらき、行為によりて全うせられたるを。23またアブラハム神を信じ、その信仰を義と認められたりと云える聖書は成就し、かつ彼は神の友と称えられたり。24かく人の義とせらるるは、ただ信仰のみに由らずして行為に由ることは、汝らの見る所なり。25また遊女ラハブも使者を受け、これを他の途より去らせたるとき、行為によりて義とせられたるに非ずや。26霊魂なき体の死にたる者なるが如く、行為なき信仰も死にたるものなり。

●信州伝道談

５月の２日の午後４時頃に上野を立ちまして、北村さんと海老原さんと畠山さんが同道しましたが、４人で行きました。汽車も案外それほど混んでおりませんで、小諸に参りま

した。普通列車なものですから、小諸に着いたのが夜の10時頃でした。その晩はいろいろ雑談し、簡単に祈って終りました。

翌日3日金曜日、祭日ですが、午前にバスに乗って、そこから一里ちょっとばかりあるところの小諸療養所にお伺いしました。歩ける連中が門まで迎えに出て来てくれました。天気は割合によくて、風はありましたが、高原の陽が割合に強いので、療養所の人たちは麦藁帽子をかぶって、なにかこっちは夏のような感じがしました。そういうふうに迎えてくれました。それから、安静時（午後1時）まで、大部屋やまた小部屋、個室というような具合に、女の方が多かったけれども、ベッドを私は逐一残りなくお尋ねしました。中にはもう聖書も開けないような、それだけの力もない重症患者もいまして、面会時間も3分間とか、そういう気の毒な人もいました。

一番、私がその中で嬉しかったのは、もう一ヶ月余り心の状態が非常に塞いでしまって、川口さんが行っても、川口さんの言うことも信用しないというような状態になっていて、況んやお医者さんや看護婦さんの言うことも受けとらない。東療〔東京療養所〕で刷ってくださった「永遠の生命を嗣ぐ者」〔「愛泉」誌11号、１９５７年4月20日発行〕というのをあらかじめ全部に私は送っておきました。その人も、とにかくそれを読んでいて、多少は気持が動いていたらしい。この方はかつてはなかなか信仰がよかったけれども、この頃どういうことになっていたのか。私が10分か15分位、その人個人にお話をしまして、それから体の具合も少しおかしかったので、按手をして祈っていたところ、にわかに溶けて、魂も体もすっかりとけて、非常に喜んで嬉し泣きに泣いていました。その人も著しい変化を現わしてくれて、私はただ聖名を称えるばかりでした。まぁそんなわけで、その人も大丈夫、立ち上がれると思いました。どの部屋でも大変喜んでくれました。

それから夕方、食堂に集まって、福音書のお話をしました。テーブルのまわりにいっぱい集まった。中にはとにかく私が東大の先生というわけで、好奇心でやって来たご連中もあり、その中にも少しく赤いのが4、5人いたようで、すぐに私はわかりましたが、大体そっちの方を少しにらみながら話していました。あとから、別な人のお便りによると、そういう人も何か考えさせられるような――まぁ信仰には入りはしないでしょうけれども――何かショックを与えたようです。あと、その集会が終ってから、10人ばかりなお残って、いろいろお話をし、深く祈り合い、援け合っていくように申し渡して、帰りました。

安静時間には数人の者と草むらの上に環坐して祈祷会をもち、そこの小池君というのがおりまして、小林君が出たあとをやっていてくれている人ですが、その小池君が非常に恵まれて、聖霊のバプテスマを受けました。なおまた、体はもう非常に悪いんですが、多くの人を助けている市川さんという、まことに輝かしい人がいました。4、5人で山路を戻って来ました。ちょうど西の方にパノラマのような夕景でなかなかいい景色でした。その夕方には、私はかねがね見たいと思っていた彗星が――ちょうど山の上が非常に空が澄んで

いまして――北極星の西北の空に垂直に彗星がおりている姿を見まして、嬉しかった。

そんなわけで、3日の日は療養所で一日暮らして、まぁ療養所にそれだけ長くいたのは初めてでありました。また、その晩は川口さんのところで数人の者と、面白く話し合って、大分腹を抱えて笑ったこともありまして、私は、天鐘院無色透明居士なんていう戒名を戴きまして（笑）、大笑いしました。なおそこで、祈祷会を致しまして、恵まれた晩でした。

翌日の4日は小海線に出まして、これも東京から行った北村さんと海老原さんと畠山さんと一緒に行きました。小海線の小海のもう一つ先の、松原湖の駅までいきまして、あそこの井出めぐみさんというお宅をお尋ねして、そこになかなか、けなげな数名を井出さんが招いて――松本さんという人がその仲介になって戴いたのですが――その他に、キリスト教は初めての人が2、3人ありまして、12、13名でしたかな、山崎君も――山崎君はその前の日は川口君と二人で小諸療養所に現われて、またその日も連絡もしないで現われて、また彼らしいやり方ですが――一緒に集会を偕にして来ました。わずか10数名の人たちですけれども、私は例によってエライ大きな声になっちゃったらしいので、驚いたらしい。この方々がまた涙ぐんで聴いてくださいまして、この集会も素晴らしかった。お昼を御馳走になって、それから今度は、小海の黒沢しげお君という昭和女子医大の学生だった人の病院へ行きました。大変、設備のよい見晴らし台にありまして、その人とは去年の夏、小諸の皆さんとの集会で一緒になった人でありまして、

「宗医一体」

とかいって、宗教と医学は一体でなくてはいかんと、ご自分は何か仏教の話をしているらしいんですが。病院の患者を全部一堂に集めまして、これはもう文句なしにみんな集めてしまって、そして、安静時間なんてものも普通の病院より短い。長い安静時間なんてやっていると、ろくな事を考えないというので、安静時間は短くていいんだというようなわけで。なかなか威勢のいいひとです。

お話の前に夕食をだしてくださったけれど、例によって「青汁」を先生は飲んでいる。野草です。野草をミキサーでジュースにして、毎日、5勺（しゃく）から1合の間位の分量を飲んでいるらしいですが、このお蔭で自分は5時間くらい寝ればもう疲労は快復してしまうようなことで、なるほどなかなか生きがいい。それで、さっそく私も飲ませられました。私が非常に元気な話をしたら、野草のお蔭だなんて言ってました。そこで面白いことを聞いたんですが、去年は説明してくれなかったと思うんですが、野草の成分と、人間の血液とは殆ど同じであるので、ただ人間の血液は鉄分でもって赤いが、野草の方はマグネシウムで青いので、あとは殆ど同じようなことを言ってました。私は自然科学のことは知りませんが。そうするとこれは

「動植一体だな」

と私は言った。動物と植物とは、これは一体だ。あんまり変りない。なるほど、牛や馬は

殆ど野草でもってああいうふうに生長している。そういうことから考えても、草食が如何に人間の体にいいかということもうなずけるわけです。人間の歯は大体、肉食するようにできていないそうですが。そんなことも聞きました。

時間ぎりぎりにお話したもんですから、時間もなくて大急ぎで駅に行きましたが、井出君というのが先に少し駆けて行ってくれて、

「一寸待ってくれ」

というわけで、電車が動き出したところへみんなが本当にとび乗るようにして、最終の電車にとび乗って、そして小諸に戻って来ました。それが4日のお話です。

5日の日曜日は午前の朝、ひまわり荘の上の方のささやき荘という竹田さんの――中学校の先生です――お宅に行きまして、その庭で小さな集会をしました。ちょうど、あんずとか桜、桃というような花が満開で、サクランボの桜の樹が竹田さんの家で満開でして、その樹下で集会を持ちまして、まるでパラダイスみたいでした。イザヤ書の63章を学びました。小さい集会でしたが、非常に天国的な恵みの中にありました。

それから今度は、午前の集会を10時から。これは川口さんがあらかじめ方々に連絡しておいたので大勢やって来ました。40、50人やって参りました。キリストの受難と復活のお話を中心に――これを畠山さんがノートしてくれたけれども――ここでやったよりもなお長かったらしい。そういう集会を持ち、あと感話懇親会、これも時間ぎりぎり一杯で、小諸駅に大急ぎで馳せつけたような次第でした。それで6時発の上野に夜11時に着く汽車に乗って、皆さんにさようならをしたわけです。小諸及び小海線、あの近所の兄弟姉妹たちは皆、大変元気でありまして、いろいろな人から、皆さんによろしくということです。

まぁそんなことで、5日の特別集会も――私個人的にはわかりませんけれども――皆、新しく恵まれて、喜び勇んで帰って行かれました。すべてキリストのご栄光にあずかり、皆さんの隠れたお祈りを感謝した次第です。

これでこの間の伝道の話はあらましご報告を終りといたします。

●啓示と恵与

それでは今日は、ヤコブ書2章の後半に入ります。

14わが兄弟よ、人みずから信仰ありと言いて、もし行為（おこない）なくば何の益かあらん、かかる信仰は彼を救い得んや。15もし兄弟或は姉妹、裸体（はだか）にて日用の食物に乏しからんとき、16汝等のうち、或人これに『安らかにして往け、温（あたた）かなれ、飽くことを得よ』といいて体（からだ）に無くてならぬ物を与えずば、何の益かあらん。17斯（か）くのごとく信仰もし行為なくば、死にたる者なり。

このヤコブ書を今、学ぶ前に少しパウロの書簡のローマ書3章をちょっと読んでみたいと思います。3章21節から。

「21**然るに今や律法の外に神の義は顕れたり、これ律法と預言者とに由りて証せられ、22イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信ずる者に与えたもう神の義なり。之には何等の差別あることなし。23凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、24功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり。25即ち神は忍耐をもて過ぎ来しかたの罪を見逃し給いしが、己の義を顕さんとて、キリストを立て、その血によりて信仰によれる宥の供物となし給えり。26これ今おのれの義を顕して、自ら義たらん為、またイエスを信ずる者を義とし給わん為なり。27然らば誇るところ何処にあるか、既に除かれたり、何の律法に由りてか、行為の律法か、然らず、信仰の律法に由りてなり。28我らは思う、人の義とせらるるは、律法の行為によらず、信仰に由るなり。29神はただユダヤ人のみの神なるか、また異邦人の神ならずや、然り、また異邦人の神なり。30神は唯一にして割礼ある者を信仰によりて義とし、割礼なき者をも信仰によりて義とし給えばなり。**

ということが出てくるわけです。しかもパウロには最後に、

31然らば我ら信仰をもて律法を空しくするか、決して然らず、反って律法を堅うするなり。」（ロマ３・14～28）

という。「人が義とされる」というこの「義」の問題ですが、即ち反対の側からいうと、

「罪なき者とされる、罪なき者として認められる」

ということです。「罪」というのはいうまでもなく、神に対する関係において間違いの事態が罪である。神に対する関係において義しいのが「義」という。ただ単に倫理的に正しいということではない。これは絶対に、

「神との関係において、神に対して義しいか義しくないか」

ということです。マルチン・ルターが悩んだ問題もこれです。

神に対して義であるためには、神の意志の現われとしての律法というもの、モーセに啓示された律法を行うことが、即ちこれを遂行するときに、我々は神に対して義である。ただ正義というのではない。行為すべてに関するもの、律法すべてに関するものです。モーセの十誡に全部これは入ってます。この驚くべきモーセの十誡という律法を真に内的に行うときに――神の意志の顕われであるところの律法を遂行する、律法を満たす――その時これは律法を満たすことによって義とされるわけです。それが律法の根本精神です。ところが、それが実は、

「義人なし、一人だになし」

と、詩篇の13篇にもある通り、ダメなんです。そこで、今や律法の外に神の義は顕われた。そもそも、律法において神の義は顕われたんですけれども、

「**律法の外に神の義は顕われた**」

と、こうパウロは言ったわけです。これは何かというと、

「**イエス・キリストを信ずるによりて信ずる者に与え給う神の義である**」

という。これは、

「イエス・キリストの信仰によって」

といって、バルトがここのところを、イエス・キリストを主語的に解釈していますけれども、それは勿論それとして真理ですけれども、ここのところをパウロが果たしてその角度で言ったかはまた別問題です。

「**イエス・キリストの信仰によって凡て信ずる者に与えたもう神の義なり**」

それはバルトが言う通りで、イエス・キリストの信仰の事態です。イエス・キリストが神を本当に信じていた――神が在ることを信じていたのではない――神に本当に信頼しぬいていた。信ずるとは神に信頼しぬくこと。だから、事柄を信ずるのではなくて、神に信頼することが信仰です。前に塚本先生も、

「にの信仰と、をの信仰」

なんてことを書かれたことがありますが、その神に信頼する。神が在ることは悪魔も信じているが、神が在ることを信じて、どうということではない。神に信頼する、即ちこれは正に実存的なわけです。

「イエス・キリストの信頼、信仰の事態、それをすべて受けとる者に与え給うところの神の義である」

というんです、この

「**律法（おきて）の外（ほか）に顕（あら）われた神の義**」

というのは。律法によって神様は義を示されたけれども、しかしながら今度は、福音においては、キリストという福音の事態においては、イエス・キリストは福音を伝えた。即ち彼自身が福音を「ユーアンゲリゾマイ」「福音した」のです。

「キリストは福音する」

という言葉を使えば、即ち行為をもってこれを顕わし、言葉をもってこれを顕わす。言行ともにキリストが福音を顕わしたが、それが「福音する」といえばいえるわけです。

キリストの福音というものにおいて、新しく神の義は今度は、力として、生命として、実力として与えられた。神の義は律法に於て啓示されたけれども、今度は、神の義は福音においては上から恩恵として恵まれて来た。恵与された。これは、旧約の方では啓示というとするならば、新約の方では恵与です。恵み与える義です。審く義ではない。恵み与える義です。だから、

「**すべて信ずる者に与え給う神の義なり**」

と書いてあるでしょ。

●義と愛は一本

「義」という言葉を聞くと、私たちは、なにか審かれるような、なにか冷たいような、固いような感じがしますけれども、そうとるのではなく、「神の義」と聞いて心は躍動し喜んでこなければ、神の義というものを受けとっていないことになる。ところが、私が無教会で教わってきた角度からいうと、福音の世界でも「神の義」というのは何か怖い。そこはもっとパウロの本当の意味を掴まないといかんと思う。

というのは、義と愛ということが、何か相対的にしか考えられていない場合が多い。そうではなくて、義と愛は一本でなくてはいけない。一本として受けとらなくては、義が義とならず、愛が愛とならない。福音における義と愛とは一本であって、何か対立して矛盾関係とか、緊張関係とかいうのではない。それはある角度からはそういう面もあるけれども、本質的においてはそうではないと、私は掴まえております。

「凡て信ずる者に与えたもう神の義なり。之には何等の差別あるなし。23凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず」

これは私たちは、直接には神の栄光体とはなれない。

24功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり。

「神の恩恵により」

というのと、

「キリスト・イエスにある贖罪により」

というのは同じことです。パウロは言い換えただけのはなし。

「神の恩恵、即ちキリスト・イエスにある贖罪によって義とされるからである」

と。即ち、私たちは律法を守り得ない、内側からこれを満たし得ない。ルター式にいうと、満たし（erfüllen）得ないんです。ですから、これを満たしたところのキリストを受けとることが即ち、神の恩恵を受けることです。それは即ち贖罪です。

律法に対して私たちは無力である。そして律法に逆らう者である。神様の意志に逆らう、神の意志、聖意に逆らう。聖意に即して歩くことがキリストの福音の事態であった。それはどうしたって、何かそういった命令やしめしではダメだったんです、私たちは。啓示や命令では、私たちはダメなんだから。無力なんです。いや、無力どころではない、逆らうんです。逆らう意志がある。それは即ち「我」という、自我意識という、「自我」というやつがこれに逆らう。

自我それ自身がただ悪いというのではない。「我」というものははっきり在る。神様はこの「我」を本当に神のものとしたい。神との関係においてこの我というものは絶対なのであって、人がこの我そのものを絶対化しようとするところに、今の文明文化の根本的な誤謬がある。民主主義といっても、本当の意味における民主主義は先ず「神主」でなければならん。

神が主と立たないような民主主義なんてものはダメです。即ち、自己を絶対化していくものは必ず衝突をきたす。争い、憎しみの世界に入っていく。

●魂は絶対的なもの

我々がなぜ絶対的であるかということはキリストが言われた、

「人その生命を、プシュケーを、魂を失わば、全世界を得るとも何の益あらんや」

と。だから、失ってはいけないんです、この魂は。けれども、その魂は、どうして失わないで在るかということになると、

「魂が失われないで在る」

ということは、

「神と繋（つな）がっているときに、魂は絶対的なもの」

です。神との相対関係がはっきり立つときに初めて魂は絶対的なものなんです。何となれば、神が絶対であるから。神様との関係においてのみ私たちは絶対である。ところが、人は傍若無神で自己を絶対化するところに間違いがある。これが根本的な罪の方向なんです。

どうも、神というものを立てるものですから、普通の考えでは、普通の人はなかなか承服しないけれども。それではそうやってごらんなさい。自分を絶対化して、社会国家、そういうものを絶対化してやってごらんなさい。それで本当にいくかどうか。これは議論ではない。議論よりも雄弁なものは事実です。事実が雄弁であって、事実が語るのであって、人間のまやかしの議論なんてものは仕方がない。事実は語っている。それをやっていけばダメなんです。ところが、どうしてもそういう角度に人間はとかくなるというところに、根本的な罪があって、神様との関係は――関係といったって――これは立たないんです。

でなければ、キリストは十字架にかからなくてよかったんです。キリストは、模範だけ示して、天界に行けばよかった。

「私はこうやって神の栄光を衣（き）たから、このまま天界に行く。お前たちもこれにならえ」

と。私たちがもし、それだけの可能性があるならば、キリストはその可能性を大いに肯定して、天界にいらっしゃった。

「さぁ、私たちも大いにキリストのようになって、なんとかして、天に昇っていきましょう」

でいいわけだが、昇れないんです。ここにキリストが地獄まで降（くだ）らなければならない事態があった。

十字架という事態は、これは地獄の事態です。地獄的現実です。普通の現実ではないですよ、十字架は。キリストがどうしても地獄的現実を自ら背負わなければ、私たちを地獄から引っ

張り出すわけにいかない。贖い出すわけにはいかない。もう放ったらかしておけば、全世界は戦争の巷、人類の歴史は80％以上、戦争の歴史だというではないですか。即ち、地獄を展開して来た。人間そのものは地獄を展開するようなやつです。これをどうしても贖いとるために、

「こうしなさい、ああしなさい」

なんて、それくらいのことではどうにかなるものではない。これは地獄を背負ってしまって、こいつをすっかり贖いだしてしまう。罪と死と地獄とサタンを征服するような驚くべき存在が現われて来て、これを引っくり返すまでは仕方がない。

だから、宗教を何か特別なことなんて思うことは大きな間違いです。

「キリストの福音がなければ、私たちの普通の現実はどうにもならない」

というんです。私たちは何か特別なことを信じているのではない。一番当たり前な、一番のっぴきならない――空気を私たちが吸うことがのっぴきならないように――霊魂がキリストを吸わなければのっぴきならなくなっているのに、気息奄々として生きている。

「気息奄々として50年、100年生きたって何になるか」

というんです。

「もっと大きな本当の息を吸って生きようじゃないか、お前たちに本当の息を吸わせてやるよ」

といって、キリストは十字架にかかり、福音したのです。

●「神の義」はイエス・キリスト

だから、これにおいて神の義は顕われた。神の義は、キリストが顕わしたところの、神との素晴らしい関係というものは、関係及びその実質というものは、義なんですよ。関係及びその実質というものが「義」なんです。だから、これは「生命」といったっていい。けれども、生命というと、普通の自然的生命のような感じがするから、それでは生命という言葉ではちょっとまだ溢れてしまう、足りない。また、義といったって、この義は素晴らしい生命的な義だから、義という言葉自身が表わせない。困ったものです、これは。生命といい、義といい、光といい、愛といい、みんなこれはそういった表現でやっぱり言わざるを得ないじゃないですか、パウロやヨハネが。義だとか、生命だとか、愛だとか、生だとか、光だとか言わざるを得ない、そういった事態なんです。だから私は、

「そういった義は観念ではありませんよ」

と言うんです。

「我らは信仰によって義とされる」

という言葉がプロテスタントではなんと薄べったく観念化してしまっただろうか。私が誤解しているのなら結構です。これが誤解でないとするなら、残念なはなしです。

そういうように、このパウロが言っている神の義は、「今や顕われた」と、彼は言い出して、ローマ書8章あたりで、キリストを絶叫しているじゃないですか。讃美している。それはパウロの一連のずうっと脈が通っていることです。

「神の義はキリストに顕われた」

といわれたときに、私たちはこの「神の義」という言葉を聞いて、それは倫理なんて言葉で表わすことのできない、生命の世界です。しかもそれは、単なる自然的生命ではなくて、驚くべき義しき世界、天的法則の世界です。天的法則がその生命をもって展開していくような、そういった事態がこの「義」です。

それでどうか皆さん、この「神の義」と聞いたときに、何か固っ苦しいような、審かれるような気持を起こしたのでは、まだ福音は受けとっていませんよ。

「ああ！　そんな素晴らしい世界に私たちを取り入れてくれるか」

と言って喜ばなくては、神の義という言葉を聞いたときに。即ち、キリストが神の義なんですから。言い換えれば、

「神の義」

は即ち、

「神のイエス・キリスト」

と同じことです。具体的な事態です。神の義が何処に顕われたか。あのナザレのイエス・キリストの実存、その十字架、その復活、その昇天、いま臨在しているそれが凡てこれ神の義であります。

「神の義は福音のうちに顕われた」

それは即ち、神・キリストが福音するという事態です。キリスト・イエスの贖罪（あがない）によって私たちは義とされた。ただ「義と認められた」くらいのことでは実はなかった。これを受けとるときに義とされたのです。

●満たされながら展開していく

だから今度は、

「信ずる」

という言葉の質になってくる。この言葉をどれだけの意味においてその人がつかまえているかということによって、もうきまってしまう、差がついて来ます、同じ「信ずる」と言いながら。私たち自身も、

「私は信じました」

といって、これでいいという「信ずる」という事態はないのです。これは限りなくいくんです、この「信ずる」という事態は。信ずるという言葉を私は今日発する、明日はまた発する。しかしながらその信ずるという事態は、明日は今日よりもなお深まっていかなくて

はいかん、質的に。そういうもんですよ。それが「信ずる」ということです。

その時その時に、本当にその人がこの信ということを受けとって、満たされて、しかも、常に展開していく、満たされながら展開していく世界です。単なる不足だったら、これは「努力、努力」という喘(あえ)ぎの世界で、いわゆる道徳の世界になる。ところが、信仰の世界は、時々刻々に満たされていく。満たされながら、いよいよ溢れて、それが展開していく。これが信仰の世界の素晴らしいことなんです。「これでいい」というところがない。

「それじゃ、いつも私は不満足で困ったな」

というけれど、信仰生活はそうじゃない。

「これでいいというところがない」

というのは、いつも満たされながら、その時その時の実存において満たされながら、その時のその人の全存在をもって満たされながら、その存在はぐんぐん展開していく。もし、展開していかなければ、

「栄光より栄光にすすみ、主たる御霊によりて主と同じ像(すがた)に化するなり」（コリント後3・18）

ということは、わからなくなってしまうではないですか。そうでしょ。

信というものを、キリストというものを、キリストの贖罪を信じ受けとる。

「キリストは贖罪した方である」

という命題を信ずるのではなくて、

「キリストは私を贖ってくださいました」

と受けとる。

「太陽の光が照っているなぁ。空気はあるなぁ」

ではない。

「太陽の光は私を今、照らしています。私は今、空気を吸っています。キリストは私において今、受けとられています」

という現実です。皆さん、一人ひとりがそうです。だから、どこまでも信仰の世界は一人、一対一の絶対の実存の世界においてであって、客観化されてどうのこうのと論ずる世界ではない。そういった意味において、哲学の方でも大いに、いわゆる観念哲学に対して「否！」と言い出したのが、あのキェルケゴールとニイチェであったわけです。

パウロは、今までのパリサイ的な信仰の「信仰より律法」の事態に対して、なぜ「否！」と言い出したかということは、このキリストを本当に身に受けとったからです。彼自身が、いや実に――パリサイ人とは他の人ではなかった――己自身の過去に対して、パリサイ・パウロが引っくり返されたから、彼は本当にこれを告白できた。自分の義でもって律法が満たされているかの如くに錯覚していたんですから、パウロは。

「これはとんでもない間違いだ。自分は本当に神様の意志を喜んでいない」

と。私の編んだマルチン・ルターの小さな本〔註：大学でのドイツ語講読のテキスト〕、『ローマ書序文』と『クリスチャンの自由』。これは小さな本ですけれども、ルターは本当にそれをしっかりと掴まえて言っています。

●代贖と代罰

ローマ書3章の26節に、

「[26]**これ今おのれの義を顕(あらわ)して、自ら義たらん為、またイエスを信ずる者を義とし給わん為なり。**」

とあります。

「自ら義たらん為」

と、この解釈の仕方が従来の無教会によると、

「神様は自ら義たらんがため」

というのは――内村先生も多分その角度だと思いましたが、今日は特にその箇所を調べてはみませんでしたので、間違っていたら訂正しますけれども――人の罪に対して神様はどしても審かないではいられない。罪は審きを受ける。それは真理です。審判です。罪をいい加減にしておくわけにはいかないというわけで、人間を救うためには、どうしてもこの罪を処断しなければならない。

人間を直接に処断したら、みんな私たちは滅亡(ほろび)です。けれども、この罪の処断をイエス・キリストにおいてこれをなした。即ち、神の子、罪なきもの自身が罪を着た。これはイザヤ書53章にある通り、

「自ら懲罰(こらしめ)を受けてわれらに平安(やすき)を与う、そのうたれし傷によりてわれらは癒(いや)されたり」

と。イエスはこの私たちの罪を「アザゼルの山羊」の如くに負って、神の審きを受けた。即ちこれは、

「代贖(だいしょく)」

罪人の代りとなって贖(あがな)うことです。あるいは

「代罰」

という言葉がありますが。代罰という言葉がちょっと、私は――ある角度からは勿論それを真理だと思いますけれども――ちょっとその代罰という言葉が、

「神は代わってキリストを罰した、我々の代りにキリストを罰した」

ということはある角度からはそういっていいけれども、どうも、

「神がキリストを罰した」

というような角度の表現がどうも私としては――まぁ私に限らないけれども――この言葉の表現が何かちょっとピンと来ないものを感ずる。キリストは神の御意(みこころ)を受けて、

「我自ら棄つるなり、また我これを得るなり」

とヨハネ伝にある通り、神の御意を受けて、彼は自ら十字架にかかられた。彼は十字架にかからないでよかったんですが、かかられた。私たちが十字架されるはずのものが、キリストは自ら十字架にかかって、

「汝たちの罪を贖った」

と言われる。だから、「代贖（だいしょく）」という言葉はしっくりするので、「代罰」というと何か「罰する」という――それはまぁ考え方ですから、それだって悪いとは言いませんけれども――ちょっとこの「代罰」という言葉がピンと来ない。

しかし、この審判、十字架ということは確かに私たちの審判がそこにおいて、

「神様は私たちの審きをキリストにおいて負わせた」

という意味において、十字架は大きな深い、私たちの憶測できない深い真理である。

「神は己れ自ら義たらんが為」

と、パウロがそこに書いている。その「義たらんが為」というのは、ただ罰する、審くという、どうしても罪は審かなくてはならない。その時に、

「罪を審くことが即ち神の義である」

というように、普通、解釈されているようですね。

「神は自ら己の義を顕し、自ら義たらんが為に、またイエスを信ずる者を義とし給わん為なり」

そうすると、この義という言葉が何か審判ということの一面だけにしか、何かとれなくなってしまう。そうすると、そのあとに来るところの、

「イエスを信ずる者を義とし給わん為なり」

というのと、

「神は自ら義たらんが為」

というこの「義」という言葉が、二つの意味がちがってくるわけです。

●神との信愛関係

「イエスを信ずる者を、イエスを受けとる者を、イエスの贖罪を受けとる者を、神様は義とする。キリストの義をそこに与える」

ということ。これは、

「義と認める」

という面もありますよ、勿論。さっき言ったように「義と認める」という面もありますけれども、

「義を与える」

という面がどうしてもその本質でなければならないと、私は思う。ただ「義と認める」と

いうだけの気持だというと、これが観念信仰に浮く。今までの、私の学んできたプロテスタントの、無教会の信仰からいうと、どうも「義と認める」という角度が強いんです、そういった把握の仕方が。「義を与える」という角度が非常に薄い。ないとは言えないでしょうけれども、薄いんです。

何故、その「義と認められる」ということと、「義を与える」ということに、私が口を酸っぱくして言いたいかというと、「義を与える」という角度になってくると、これは本当にパウロやヨハネが受けとっている、御霊の信仰の中に、これが入っていく所以であると私は思う。ところが、「義と認める」となると、どうしてもこれは理解的な角度になって、これが御霊の信仰とは少しズレをきたしている。

ここに、私は、相当重大な、今までの無教会の、この義ということの把握の仕方、

「義とされる」

ということに対する把握の仕方の――なんと言いますかね――欠陥が、少なくとも弱さがあると思われる。だからそこでも、

「おのれの義を顕して、自ら義たらんが為」

というこの「義たらんが為」という語も、単に「審く」というだけの義であるように、私は今まで無教会においては、受けとってきました。けれども、「自ら義たらんが為」というのは、「罪を審く」ということにおいてはその面もありますけれども、もう一つ大事なことは、

「神様が人との関係を本当に義しくしよう」

ということです。

実は、はじめっからそうだったんです。神様は、はじめアダム・イヴにおいて、私たちを信頼してかかっていらっしゃるわけでしょ、あの楽園喪失のところで。神はアダム・イヴをパラダイスにおいて信じ、愛しておられた。神様の信じ愛していた

「信愛」

というものを、アダム・イヴが受けそこなった。神様に対する信愛をもって応えればよかったのに、受けそこなって、単に命令と思ってしまった。だから、これが叛くような角度になる。神様の信愛に対して本当に信愛したならば、禁断の実なんか戴きませんよ。

「神様、貴神が私たちを愛し信じていてくださるんですから、禁断の実なんか、ああ、戴きませんとも」

というわけです。蛇が何と言ったって、そんなものははねつけてしまって、喜ばしくあるわけなんです。ところが、神の信愛に対して、この霊魂が信愛してないものですから、律法を犯すようなことになる。

「この神の信愛に対して私たちが信愛をもって応える」

これが神の私たちに対する、私たちとの関係における「義」というものであった。この神の信愛というものを――キリストを十字架にかけて復活させたこのキリストという、福音

という実力を――ここに置いたものですから、神様の実力が今度は具体的に人間の中に臨んで来て、罪がすっ飛ばされて、生命の事態が新しく開示してきましたから、神が自ら義となった。本当に今度は自ら人間に対して、義を現わし、人との関係を実力をもって顕した。これが、

「神が自ら義たらんが為」

というこのパウロの本当の意味ではないかと私は思う。そうしたらば、

「キリストを受けとった者は義とされる」

ということは、神との信愛関係に入って――義しい関係というのは信愛関係です、もう一つ言い換えれば――神様との、信と愛の関係に、その信愛関係に入ることです。

「これ今、おのれの義を、おのれの信愛を顕して自ら信愛たらん為、キリストにおいて信愛たらんため、またキリストを受ける者を信愛とせんが為なり」

と。こうしたら、よくわかるじゃないですか。

このローマ書の「義」というものの、私のこの把握の仕方がちょっと正直、新しいかも知れません。そういう意味で、「義たらんが為」という。だから、義はもう私たちには嬉しいんです。義が嬉しくなかったら、それはちょっとおかしい。義は審くんじゃない。それは、

「そこにおいて我々と信愛関係が立つ」

ことである。信愛関係が立てば、罪は自然に除けられてしまう。排除されてしまう。そこには罪が入ってくる余地がなくなってしまう。

罪というものを何か客体化して見つめているうちは、罪に負けますよ。そうではない。神様との信愛というものを、神の信愛というものを見つめて、その中に入っていけば、罪は自然に逃げて行ってしまう。自然に排除される。罪に勝つ秘訣はここにある。私たちが罪を、暗黒をみつめていたら、暗黒の中につり込まれてしまう。サタンに腕をとられてしまう、足もとられてしまう。光を見ていたらば、光が入って来て、サタンがこの光を見て逃げて行ってしまう。サタン・罪・死は逃げて行ってしまう。それが我々がこの罪に勝ち得るゆえんです。なんとなれば、罪よりも素晴らしいものが私たちの中に、罪・暗黒・死・冷やかなるものよりも素晴らしいものが、聖霊の生命が私たちの中に入って来るんだから。

●上から聖霊の生命が入って来る

だから、それは直ちに歓喜の事態、喜びの事態、楽しみの事態です。義は楽しみなんです。ルターが、

「愛（Liebe）と楽しみ（Lust）を以て律法を全うするものでなければ、本当に律法を満たすということはない」

と言っている。なぜ、ルターが「愛と楽しみ」なんてことを言うかというと、この角度なんです。

「律法を満たすということは楽しみと喜びと愛をもって自由になることである。律法の拘束なしに、神的に〔göttlich〕神の意志にそって、神に対して真っ直ぐに〔rechtschaffen〕正しく、生きる〔leben〕ときにはじめて律法を満たす」

という。これは素晴らしい定義だと私は思う。これはルターの『ローマ書の序文』のところにある。そして、

「あたかも律法〔Gesetz〕もないかの如く、罰もないかの如くに振舞うときに、はじめてそれが、律法を満たす〔Gesetz erfüllen〕というものである。ところが、そんな楽しみ、自由の愛からのそんな喜びというものは、聖霊しか他に与えない。聖霊〔Heilige Geist〕が私たちの中に与えるもので、そうでなければ、これは入ってこない」

というんです、ルターは。

「それはローマ書の5章5節にある通りに、我らに賜いたる聖霊によりて、神の愛が、われらの心に注げばなり」

と。上から注がれる愛、聖霊がやって来たならば、神の愛、聖霊がやって来たらば、私たちの中に生命と愛が――「愛の生命が」と言ってもいい――愛の生命が動き出しますから、神の意志を喜ぶ。だから、律法は自然に満たされていく。こういう角度なんです。

ルターが「聖霊」のことをこういうように言っていることが、この聖霊の一点で今までの無教会がどうしてもズレていました。正直、私はそこを通って来ましたからよく知っている。この聖書が、パウロの、ヨハネの、ルターが言うところの事態が、「義」だとか、「信仰」だとかいうような言葉がどうしても何か観念的になってしまうから、何か固っ苦しくなって、そして下手するとパリサイ的になる。

「また、本当の信仰というものは、神の業である」

「信仰というものは私たちにおける神の聖業（わざ）である」

とルターは言う、「信とは神の業なり」と。

「それが私たちを引っくり返して、新しく神から生まれさせるものである。ヨハネ伝1章13節にある通り、

「人新たに生まれずば」とキリストがヨハネ伝3章でもおっしゃっている通りです。旧いアダムを殺してしまう。そして、その人を全く別な人に、その心において、心情において、また凡ゆる外の力において、それを全く別な人に変えてしまう。しかも、聖霊をここに伴い与えるのである」

と書いてある。やっぱりここでも「聖霊」なんです。このルターの独文の『ローマ序文』は、本当にプロテスタントがもういっぺん読み直して、ルターが言っていることを本当に掴（つか）んでいるか、掴み直してもらわなければ。いいですね。

私たちは信仰によって義とされる。救いというものは、私たちは信仰のみによる。正にそうです。私たちの救いは

「信仰のみに由る」のです。キリストを受けとることだけです。

「プラス・アルファー、プラス・行為」〔信仰＋行為〕ではない。これはパウロが言う通りです。

私たちが神様の前に義とされるのは、キリストを受けとることのみによる。キリストにおける信愛という事態が私たちに入って来て、義とされる。いや実に義を与えられる。義の事態に入っていく。「義とされる」ということは、観念的にされているのではない。事実、その義というものの事態に入る。私たちがただ命題的に義と認められるために、キリストが十字架にかかるのでは、勿体ないですよ、イエス・キリストの十字架は。イエス・キリストの十字架・復活が、私たちが義とされたり生命ある者とみなされる、そんなことでは勿体なくてしょうがないです、キリストの事態は。あれだけキリストが実存し、のっぴきならぬ十字架にかかり、そしてあの生命体として復活したことを、私たちがただ観念的に、

「十字架によって義とされた。とにかく罪がないと同じことになったそうです」

なんてなことで、どこに福音があるか。私たちの中にその贖罪が事実やって来て、その生命がやって来て、神との信愛関係が事実、立っている。

だから、私たちは相変わらず、ダメのカスですけれども、ダメのカスでないものが入って来たんです。そのための贖罪（あがない）、そのための復活の生命（いのち）です。単なる頭脳（あたま）で承知しているような世界ではない。それだったならば、そんな信仰だったら、必ずそれはやがて落っこちてしまう。そんな信仰だったら、始めは勢いがよさそうだけれど、ダメになります。どんな人でも、それは必ずダメになる、そんな信仰だったら。

本当に上から臨んで来たんだから、この生命が入って来たらば、それは天界に向かって――空に上昇していくところのジェット機もかなわないような――力を持っている、推進力を持っている。罪を排除して昇っていく。それが即ち、信仰でしょ。もうそう言ったら、私は他に殆ど説明しなくても、もう皆さんはゴールがわかっている。

●観念信仰

それではまた、ヤコブ書に戻ります。2章14節、

14 **わが兄弟よ、人みずから信仰ありと言いて、もし行為（おこない）なくば何の益かあらん、**

「信仰が在る」というならば、本当に今、言ったようなパウロが掴まえたような信仰が本当にあるならば、

「行為（おこない）なくば何の益かあらん」

なんて、こんなことをヤコブは言う必要はなかった。けれども、現実を見ると、いわゆる観念信仰なんです。いわゆる観念信仰があるから、ああ、昔も今も同じことです。

「自ら信仰ありと言うけれども、それは観念信仰だよ」と。そうすると、行為は出てこない。そうしたらば、

「行為なくば何の益かあらん」

それでは本当の信仰ではない、とヤコブが言う通りです。

神学があり、聖書知識があり、何がありましても、行為なくばダメだ。これは実存の世界だから。福音の世界は実存の世界で、聖書知識をもって代えるわけにはいかん。神学をもって代えるわけにはいかん。勿論、聖書知識も神学も大事です。私はある時は、神学が非常に大事だから、それを言いました。勿論、私も観念神学を言ったのではない。

「神学することが大事だ」

と言った。今も勿論、神学しているわけです、こうやって。福音するわけです。

かかる信仰は彼を救い得んや。15もし兄弟或は姉妹、

本当に救われていれば、もう行為の事は、パウロと同じように、言わなくていい。けれども、ヤコブは今度は現実を見て、本当の信仰でない事態が多いものだから、

「それでは困る、本当の行為が出てこなければダメではないか」

と、ヤコブは現実を見て言おうとしている。

ヤコブはエルサレム本山の角度ですから、ユダヤの伝統的な意味における律法に対する行為という、非常に強い角度を伝統として持っていますから、行為が出てこなければ、非常にそれは彼には気に障るわけだな。だから、なおさら強く言わざるを得ない。しかし、ヤコブは「信仰＋行為」といって、ただ二段構えに言っているのでは勿論ない。

裸体にて日用の食物に乏しからんとき、16汝等のうち、或人これに『安らかにして往け、温かなれ、飽くことを得よ』といいて

何もそれに援けをしないで、そんな空手形で口ばっかり言っていて、

体に無くてならぬ物を与えずば、何の益かあらん。

そんな口先信仰はダメだと。これはまたヘタすると、無教会はひょっとすると言葉ばっかりの信仰の事態です。実践が伴っていないということを、ある意味において言われても、仕方がない面もなきにしもあらず。

二段構えだけれども、とにかく一生懸命でいろんなことをやっているカトリックは、ある面において学ばなければならないところもある。けれども、なにもカトリックを学ぶ必要はない。私たちはこの信の事態を本当に掘り下げていけば、そんな観念でなくなるから。

●信仰から発している行為

ヨハネ第一書の3章17節を見ると、やはり同じようなことが出ています。

「17世の財宝をもちて兄弟の窮乏を見、反って憐憫の心を閉ずる者は、いかで神の愛その衷にあらんや。」（ヨハネ一３・17）

そんな者は神様の愛がない。財産は、財は私有です。私有だけれども、私有だからといって私（わたくし）したらダメです、そういう私有は。財は私有だけれども、しかし、これは神様の所有（もの）なんだから、人のために充分にこれを善用する。私たちも時には本当にうんと財があるといいと思う。本当に困った人たちを何とかして援けてあげたいということを正直、思う。療養所から出た方々が一つの集団をなして、何か仕事ができるようなことの基礎（ファウンド）でもあれば、本当にいいなぁと思う。けれども、とにかく問題は、そういった財も何もこれはみな神様のもので、それが本当に受けとれていなければ、それが善用できないわけです。

17 **斯（か）くのごとく信仰もし行為なくば、死にたる者なり。**

信仰それ自身が死んだものである。信仰それ自身が、行為がなければ、死んだものである。草花も、もし花が咲かなければ、死んだも同様だというのと同じです。

18 **人もまた言わん『なんじ信仰あり、われ行為あり、汝の行為なき信仰を我に示せ、我わが行為によりて信仰を汝に示さん』と。**

なかなか面白いことを言っている。けれども、本当に行為があるというならば、行為だけがあるということはない。真の行為というものは必ず信仰から発する。

「信仰から発していない行為は本当の行為ではない」

と、ルターも言う通りです。いわゆる「行為の聖者」というものは――これはカトリックのある面に対してのルターの悪口ですけれども――それがまた、当時のパリサイ人がそうです。外側はいかにも宗教的な行為をやっているようだけれども、内側は穢れと何とかで満ちている。

「偽善なる学者、パリサイ人よ」

と、キリストが責めた「行為の聖者」のことです。即ち、外側の上辺（うわべ）の行為だけが行為と思っている。だから、行為が本当の行為であるならば、これは必ず信仰から発しているのであって、信仰から発していない行為なんてものは実は本当の行為ではない。また本当に行為にあらわれて来ないような信仰というものは、どうもあやしげな信仰だと。逆もまた真なりということです。

「それでは、どの辺に線を引っ張って、どこまでが本当の信仰でしょうか？」

なんてなことになるでしょう。正直、私たちは信仰と行為とが相即してませんからね。けれども私たちは、信仰はウソだとは思っていない。それでは、どの辺だったら本当で、それから先がウソなんでしょうか。

そこで、私たちの信仰の信そのものの把握がどうしてもひとつのある革命をもってこなければ、新しいひとつの角度をもって来なければならない。いや、もって来らざるを得ないと私は思う。そこのところが何か今までは少しぼかされている。

「救われるのは信仰によるだけだ」

と。それは本当にその通り。義とされるのは信仰による。どんなに素晴らしい行為が出て

たって、行為で救われるわけではない。それはその行為が、その信仰が本ものだから出てくるだけの話で、行為がどんなによくたって、それで救われない。こと救いに関し、こと神の前に義ということに関しては、これは「信仰のみ」です。

けれども、どうもその人は意志薄弱でなかなか行為が出てこない。それでも、信仰は本ものだ。その通りです。その通りだけれども、この信というもの、これの質がいよいよ深化されていくことが必要です、信仰の質が深化されていくことが。

19 **なんじ神は唯一なりと信ずるか、かく信ずるは善し、悪鬼も亦信じて慄けり。**

一人の素晴らしい神を見て、悪鬼はこれを信じて、

「ああ、恐ろしいなぁ、俺たちは亡ぼされる！」

といって戦慄いた。マルコ伝の5章にも出ているでしょ。悪鬼につかれたのが神の子に、

「何故私を責めるか」

なんて言って。だから、キリストが、

「我をあらわすな」

と言われた。悪鬼はちゃんと見えるから。とにかく、次元が霊的な次元なものですから。

●信は霊魂の転換という内的根源行為

20 **ああ虚しき人よ、なんじ行為なき信仰の徒然なるを知らんと欲するか。21 我らの父アブラハムはその子イサクを祭壇に献げしとき、行為によりて義とせられたるに非ずや。**

創世記の15章と22章。創世記15章では、

「アブラハム、エホバを信ず。エホバこれを彼の義となし給えり」（創15・6）

即ち、アブラハムの子々孫々はもう百歳のアブラハムから、常識的には子供ができないけれども、

「お前の子供たちは空の星の如くになって、諸々の民が幸を受ける」

と祝福し約束された。アブラハムにはわからない。わからないけれども、神様のおっしゃることだから、

「はい！」

と言いました。そうしたら、

「神はこれを義となし給うた」

と。神様に「はい」とアブラハムが言ったということは、彼は自分の意志を否定し、自分の理性を否定して、「はい」と言ったんですよ。ただ口先で「はい」と言ったのではない。だから、信というものは、全存在をそこで引っくり返すことではないですか。自分の全存在をそこで引っくり返して、ぶっ倒して、神を「然り」ということは、こんな素晴らしい内的行為がありますかね。己の存在を否定するわけです。

「**己を憎まずば、わが弟子となることができない**」

と。これがキリストの言葉です。己を憎むということはどんなに難しいことであるか。

「**己が生命を捨てなければ、本当の生命は与えられない**」

と、ヨハネ伝でも言っておられる。ヨハネ伝にも、マタイ伝にも、ルカ伝にもあります。

「**己の生命を捨てなければ、己を憎まなければ、わが弟子となることができない。神の御意を行うのでなければ、天国に入ることはできない**」

と。キリストの言葉は、それがいわゆる信仰のことであろうと、何であろうと、実はみんな角度は行為的な方面です。行為的です。実存的、行為的なんです。

「**アブラハム、エホバを信ず**」

ということは実は、内的な驚くべき自己否定であるんですから、これは内的行為なんです。自己をひっくり返すんだから、いい加減な手や足を動かすこととは違う。

だから、そもそも信仰とは「我に死ぬ」ことである。我に死ぬということは神様に「然り」と言って、我に「否」と言うんですから、信仰くらい恐ろしい行為はない。信仰くらい恐ろしい内的行為はない。だから、多くの人がなかなか信仰に入れないではないですか。また、いわゆる信仰に入ったという人が、一向ダメなんじゃないですか。なぜですか。信仰が行為だからなんです。信仰が実は根源的に驚くべき行為だから。

信仰はやさしいことであって、難しい。難しいことであって、易しいという。困ったものです。だから、信仰は根本的に内的行為なんです。その内的行為は瞬間にはできますよ、ある時は。大いにできたつもりですよ。ところが、本当の信仰というものは、私たちの内的な行為として、霊魂が引っくり返されて、神に向かうということは、マルチン・ルターが言っている通り、

「真の信仰は神の業である」

という。「信仰は神の業である」ことは一体、誰において素晴らしく現われたか。誰あらん、パウロであります。彼は自分が信仰ある者と思っていたところが、己の義を有っていたところが、復活のキリストに引っくり返された。これは神の行為じゃないですか。全存在を彼は引っくり返された。目が見えず、耳は聞こえず、口はきけず、という事態に入ったではないですか。神様に打たれたではないですか。即ち、信の全存在は、彼をそこで否定された神の業であった。そうしたら、彼の中に神を「然り」という、

「キリストよ、貴神が然り！」

という驚くべきものが彼の中から湧いてきた。これは聖霊の能力です。聖霊が彼の霊魂をすっかり中に捉えて、聖霊の質に彼の霊魂を変えてしまった。だから信とはこの行為です。

「それでは、私たちは復活のキリストにどうやってお目にかかりましょうか？」

なんて言って、パウロのような奇蹟を考えることはない。

私たちもダマスコ途上で引っくり返される。即ち、皆さんが集会をしようが、あるいは

どこかで祈っていようが、何か事をしていようが、どこであるかしらん。あなた方一人ひとりにダマスコ途上があるんです。そうして、キリストの十字架が本当に見えて来て、キリストの復活が本当に見えてきたときに、パウロと同じようにその人はこの信の中に入る。即ち、内的霊魂の転換という驚くべき行為がそこにおこる。信ずるとはそのような霊魂の転換という驚くべき内的根源行為である。だから、その意味において、信は即ち――私は「信行一相」と書きましたが――信は即ち、信即行である。

●言行信一如

「原始（はじめ）に行為ありき」

と、ゲーテが『ファウスト』の中で言った。ゲーテがあそこで言ったよりかもっと深い角度から、これを今、私は申していると思いますけれども。しかしとにかく、ゲーテはあそこで「原始に行為あり」と言ったことは、さすがにゲーテなんです。ドイツ人はやっぱり、その意味において、意志的、行為的な民族です。

「原始に行あり」

はじめに神の行あり。天地創造という原始に神の行があった。今度は、言行一致だ。

「光あれと言い給いければ光ありき」

これ、言行一如、言行信一如です。言・行・信。神の言、神の行、人の信、というように言行信一如。だから、キリストは何かというと、

「太初（はじめ）に言（ことば）あり。言は神と偕（とも）にあり。言は神なりき。この言に光があった。これがやって来たけれども、世は之を受けなかった。（あるいは世は之に勝たなかった）」

この「言」は同時に、キリストという驚くべき現象体ですから、神の現象体ですから、神の行為体ではないですか。神の行為体は神の御意を完全に信じ受けとっている信仰体じゃないですか。言行信、これはみんな一如ですよ。これを受けとらなかったら、もういつまでたっても、観念の表面でもって、

「これとこれはどういうように関係するか」

とかやっているプロテスタント神学なんてものは気の毒なもんですよ。

皆さんはこれが受けとれる。なぜ、私たちはこれが受けとれるか。即ち、十字架・復活・聖霊の、三相一貫のこの受けとり方をしていけば、これが、

「ああ、その通り！」

と、なんにも問題はない。だから、

「アブラハム、エホバを信ず。エホバこれを彼の義となし給えり」

は根源的に彼の行為でありました。だから、どうですか。アブラハムはこれに対し、創世記22章にきて、

「**さぁ、イサクを献げろ**」

と。アブラハムの信が本ものであるかどうかが、そこで験されるわけです。アブラハムの信仰が本ものであるかどうか。アブラハムの信は根源的に行であったから、「イサクを献げろ」と言われたときに、もしアブラハムの信仰が観念であったならば、

「**なぜ、そんなことをおっしゃるのですか？　せっかく貴神が約束してくださったこの子供を献げたら、どういうことになりますか。あと、祝福される子孫なんかできないじゃないですか**」

と、これは当然、問いたいところです。ところが、アブラハムは、

「何故?と問わなかった。けれども、為して而して死ぬことあるのみ」

"No reason Why! But to do and die."

これはテニスンの有名なあの「軽騎兵の突破」（The Charge of the Light Brigade）の中の言葉です。アブラハムは即ち、何も言わないで直ちに神様の言うことに従って、モリヤの山に向かって支度をして出発を始めたではないですか。彼は答えない。答えないで、ただ直ちに行為をもって答えたじゃないですか、直ちに行為を以て。だから、ヤコブがここでそれを言いたいんです。

22 **なんじ見るべし、その信仰、行為と共にはたらき、行為によりて全うせられたるを。**

もういっぺん言い換えれば、

「その信仰は即ち行為にして、行為となって現われたり」

ということ。即ち、行為となって現われた。

「信仰は内的行為にして、これは外的行為として新たに現われたのである」

と、私は言いたいところです。それが、

「**信仰、行為と共にはたらき**」

と、ヤコブはちょっと並べたような言い方をしましたけれども、アブラハムの信が本当に内的にはげしい信、行為的信でありましたから、彼が神様に言われたときに、それが直ちに今度は外的行為として動き出したではないですか、外的行為として。だから、そのように本当の生命の世界は、ズレがなく必然的に動いている。必然的に、第二の自然体として動いている。それはもう自由なる霊魂になっているから、神に捉えられた霊魂になっているから、喜びと勇気をもって進んでいくことができる。できるんです、これは神の力ができる。人間にはできない。神の力がなさる、神の業なんです。

●東洋的日本的な把握

だから、ルターもそのあとで言っている。

「おお、なんと信仰というものは生き生きとした、活動的な、行為的な、力強い事態で

はありませんか。だから、そのために彼は間断なく善き事に働かざるを得ない。そして、お前はいいことをしたかと問われない先に、もうしてしまっている。お前は行為をしたかと問わない時に、既に本当の信仰は、行為をなしている」

という。さすがにルターも感激して、「おお！」なんて言っている。パウロの「信仰、信仰のみ」と言ったのを捉えたルターが、こんな素晴らしい言葉を発して、

「この行為を信仰から離すことのできないことは、あたかも火からその燃えることと、光ることを離すことができないと同じである」

という。火は燃え、また光らざるを得ない。そのように、真の信仰は火の如きものであるから、行為に燃え、また光らざるを得ないという。愉快な言葉でしょ。

『クリスチャンの自由』の方でも同じようなことを言っている。今度は、

「信仰は霊魂を言に結びつけて、神の言と一つにしてしまう。信仰は霊魂をキリストと一つにしてしまう。信仰は霊魂をキリストと結びつけてしまう」

という。キリストをただ客体化していない。だから、このヤコブが、

「アブラハムはその子イサクを祭壇に献げしとき、行為によりて義とされたるに非ずや」

「行為によって義とされた」

というのは実に、信行一如の意味で、信を行じたから、即ち信がそこに現われたから、これが偽りなき信であることがわかったから、義とされたんです。「行為によって義とされた」というのは、

「行為が出たから義とされた」

というように、分かれて考えてはダメですよ。それでは、

「行為のない信仰をするときは義とされない」

と、ヤコブの言葉を表面ずらから見ていくと、そんなように下手するととられますから。まぁ、カトリックはそういうふうにとるんでしょうね。だから、

「行為、行為」

と大いに言うんでしょうね。けれども、ヤコブの根本精神は、そういうところにはないと思います。ただ歴史的に見て、ヤコブという人がとにかく、伝統の側の人ですから、多少そこに二段構えのかげもあったとは思いますけれども、決して二段構えを本式に考えていたとは、私は思わない。やっぱりこれは、パウロとヤコブとは、根本においては相通じていると思う。ただ、信の事態においては、何と言ったって、パウロはしっかり掴まえてくれた。ただし、それがうっかりすると、

「信仰のみ」

だって、いい加減なことを言うから、ヤコブのような角度からも言ってもらわないとまた困るという。まぁやっぱり聖書はよくできていますよ。

ただ、私たちはそんな辻褄というような問題ではなくて、これが私たちの東洋的な把握なんです。東洋的把握は、私たちが東洋人だから、日本人だから、日本的な把握をして、そして福音の本質に、ある意味においては、もっと迫ってかまわないのです。一向さしつかえないので、これはみ霊の導きであります。ですから、このパウロ先生も少しまだ、まだるっこくなることがある。

「信即行」

そういうような表現においては――パウロの実存を今、私は批判しているのではない。パウロの表現は結局ヨーロッパ人ですから――信即行、この「即」の字、

「信行一相」

である。

●本質即現象

外に発しては行となり、内においては信となる。全く一本です。そうなって来たら楽ですよ。けれども、現実は即していません、私たちは。相変わらずダメですよ、ダメだけれども、いいんです。本当の展開をして誤魔化しがなくなっていく。そして、霊魂は本当の力を得ていく。なんとなれば、それは真理であるから。真理でなかったら、どこかに、ひっかかりがあって、ズレがあって苦しい。この真理の世界は、

「これが成るほどそうだなぁ」

ということが段々のみ込めていく。しかし、人間の構造というものは、決してただ考えられたようなものじゃないですから。ある時は大いに努力してやってみたら、

「ああこれはよかった。けれどもこの奥に信仰が働いていれば、もっとよかった」

と。また、やってみると、逆に今度は、信仰というものがうながされて、そして、その行為、その努力の行為から、逆に信が展開していくということもありますよ。人間の構造というのは、いろいろですからね。そんなことを、私はケチケチものを言っているのではない。大いに断食をしてみようというときは、断食しなさい。なんでもやってみるがいい。けれども問題は、この角度はいつも

「信行一相、信即行」

信が即ち最も激しい行であった。だから、神の御意を受けとっていたキリストの信仰そのものが驚くべき行です。あそこではぴったり一つですから、キリストは。

「言信行がぴったり一つ」

ですからね、イエスというひとは。だから、あの自由自在な展開をしているわけです。

けれども、私たちは質的に、やっぱり使徒たちと同じように、この原始福音の角度につかまえられていかなくては。私たちは聖書が嬉しくなって来たでしょ。聖書が嬉しくなってきた。聖書が読めてくるようになってきた。もうつまらない――つまらないということ

もないけれども――紆余曲折を経て、

「どれだけ参考書を読まなければとか、なんとか」

と、そんな顧慮は一つも要らなくなってしまった。読むことは結構ですよ、読んだらいい。けれども、私たちは本城に迫っているんです、敵の本城に――敵じゃないけれど――本当の源泉でもって水をとにかく汲んでるんです。皆さん。源泉から、聖書の源泉から、み霊の光をもって、その能力（ちから）をもって、今、水を汲みつつあるじゃないですか。あせらなくて済む。そうしてまた、「限りなく行きましょう」という気合がかかってくる。

「限りなく行きましょう。これでいいなんてところは絶対にない」

と。ところが、観念信仰の人は、あるところで、ちょっといわゆる厳密な把握をすると、

「ああ、これでいい」

なんて思うかもしれない。そうじゃない。限りない無限の世界です。

このイサクのところ、創世記15章と22章は、私たちはピタッとつかまえる。アブラハムの信はなるほどこれは本ものだと。それは行為に現われたから本ものではない。どっちも信にして行なんです。一番本当の、真のその人の信仰の告白は、何か言葉ではない。全存在が言葉なんです。だから、行というのは、現われでありながら、同時に本質なんです。行というのは、外に現われていることは実は、同時に本質なんです。だから、

「本質即現象」

ということになる。それは即ち言葉です。私たちの行為が即ち言葉です。行為が一番の雄弁なんです。行為なんていうのは一部分に過ぎない。その人の行為そのものが、生活そのものが、言葉として表現される。だから、

「ああ、あの人は」

といって、本当に人を讃えるときには、その人の行為をたたえるではないですか。その行為が本当の言葉だからです。

天国に入るか、入らぬかの資格はどこにあるか。「如何に行いしか」といってキリストは、マタイ伝の25章で言っている。

「如何に行いしか、如何に実存せしか」

と。キリストという人を信じていたかどうかではない。イスラム教でも、未信の人でもいい。その人は真に人として生きたかどうか、神様の大きな審きの中には、その判断というものは結局最後は実存で問われていく。本当に神を受けている実存が、何といったって一番素晴らしい実存なんです。これは仕方がない。これは質的にいったってそうです。神を、キリストを本当に受けとっている実存は一番素晴らしいことになる。それは、孔子は立派な方でしょう。けれども、本当に受けとって生きた一人のクリスチャンはもっと輝かしい。

23またアブラハム神を信じ、その信仰を義と認められたりと云える聖書は成就し、かつ彼は神の友と称えられたり。24かく人の義とせらるるは、ただ信

仰のみに由らずして行為に由ることは、汝らの見る所なり。

この表現から見ると、いかにも信仰だけでは足りなくて、行為に由るというように見えますけれども、

「これは信行一本で相即して、どうしても、その因果関係があるからだよ」

というのがヤコブの心でしょう。

●「ギルガル」（引っくり返り）

25また遊女ラハブも使者を受け、これを他の途より去らせたるとき、行為によりて義とせられたるに非ずや。

面白い例を持ってきたもんですね、これは。ヨシュア記の2章から6章にわたって書いてあるんですが、まぁ皆さん、読んでごらんなさい。面白いから。

遊女ラハブは、イスラエルの神様が素晴らしい出エジプトの業をしたり、アモリ人をやっつけたりしたことを聞いて、そのイスラエル人がやって来たというので、非常に恐ろしくなって、その間者が二人やって来たときに彼らを入れて、これを自分の味方の者たちに知らせないで――エリコの王様にですよ――逃がしてやった。ヨシュア記2章11節、

「11我ら之を聞くや心怯けなんじらの故によりて人の魂きえうせたり。汝らの神エホバは上の天にも下の地にも神たるなり」（ヨシュア2・11）

天上天下、こんな素晴らしい神様はないと言って、このラハブがとにかくエホバの神の前に懼れた。それでその間者の味方となって、その命を危うきから逃がしてやった。

「その代り、私と私の家族をみんな助けてくれ」

と約束させて、

「窓に赤い紐をたれて置くから、これが目印だ」

なんて、面白いことが書いてある。

ヨシュアがヨルダンの河を渡っていくときに、契約の櫃が先に立って行きまして、ちょうど紅海を渡るときと同じように、水がすっかり止まって、その中をどんどんイスラエルの軍が入って渡って、今度はまた皆が渡ってから契約の櫃が最後にまた行く。契約の櫃が先頭となり後尾となって、河を渡って行く。そういうところは面白い。神様は、我らの先頭となり後尾となって護り給う。このことはヨシュア記の3章6節と4章11節のところを見ると、わかります。

そして、ヨシュアが向こうへ、カナンの岸辺に着いてみると、素晴らしい幻に出っくわすわけです。ヨシュアの軍勢が護られる。ヨシュア記5章13節から15節、

「13ヨシュア、エリコの辺にありける時、目を挙げて観しに、一箇の人、剣を手に抜き持ちて己にむかいて立ちいければ、ヨシュアすなわちその許にゆきて之に言う、汝は我等を助くるか将われらの敵を助くるか。14かれいいける

は否われはエホバの軍旅の将として今来れるなりと

神の天軍の将が現われたわけです。

ヨシユア地に俯伏て拝し我主なにを僕に告げんとしたもうやと之に言えり。

15 **エホバの軍旅の将ヨシユアに言いけるは汝の履を足より脱ぎされ汝が立てる処は聖きなりと。ヨシユア然なしぬ」（ヨシュア５・13～15）**

モーセに言われたエホバの言葉みたいなわけです。出エジプトから遂にカナンに入ったでしょ、曠野を通って。そして遂にカナン入りをしたわけです。

「今日こそは、私たちをそのエジプトのはずかしめから逃して、これは全うしてくださった時である」

というので、ヨシュア記５章９節、

「9 **時にエホバ、ヨシユアにむかいて我今日エジプトの羞辱を汝らの上より転ばし去れりと宣まえり。是をもてその処の名を今日までギルガル（転）と称う」**

（ヨシュア５・９）

「ギルガル」というのは「引っくり返り、転ばし」という意味です。ギールガール。即ち、カナン入りは、出エジプトからカナン入りは、ちょうど我々がキリストに今、救われて義とされて、それは霊化されて、

「遂にキリストの像に化するなり」

という、その転回を現わしているようなものですね。正にこのギルガルです。私たちがすっかり霊肉ともに贖いとられてしまったときが、即ち過去の罪と死からギルガルされるわけです。引っくり返されて、過去の罪と死とを転ばし去ってしまって、私たちは、悔い改め、転回また転回、翻りまた翻っていくわけです。

遊女ラハブはキリストの系図の中にも出てくる。マタイ伝１章に。だから、面白いです。これもとにかく信仰によって生きた遊女だった。

26 霊魂なき体の死にたる者なるが如く、行為なき信仰も死にたるものなり。

「信仰なき行為も死にたるものなり」

と、パウロなら言うところです。ところが、

「行為なき信仰も死にたるものなり」

と。これはヤコブが言う角度ですな。面白いですね。

「霊魂なき体の死にたる者なるが如く」

体も霊魂がなければ死んでいる。霊魂がお留守になっては、死体は霊魂がない。

「行為なき信仰も死んだものである」

行為というものに現象しないような信仰は死んだものだと。それも真理です。また、信仰なき行為もダメなんです。そんなのは偽善なる行為だという。どっちも真理です。

「空気を吸わない肉体が死んでいるように、聖霊を吸わない霊魂は死んでいる」

と、私はもうひとつ言いたいところです。

それで、大体、まぁそんなことでよかろうと思います。何か言い忘れたような気もするのですが。では、今日はそこまで。

●祈り

聖なる律法（おきて）を与え、キリストの義をもって、これを私たちに開示してくださった救いの神様。今日はヤコブ書第2章の後半、信仰と行為の事態について。私たちは行為そのものを問われたのでは、どうにもなりません。しかし、神様、信仰を問われ、そしてその信仰が本ものであるかを問われる時に、いよいよ貴神の前に平伏し、キリストを受けとり奉る。私たちは、

「信仰なき我を憐れみ給え」

と。ただイエス・キリストの信が即ち、私たちの中に恩恵として具体的に戴き、信なるイエス・キリストそのものを、愛なるイエス・キリストそのものを、ご恩寵によって、贖罪によって戴くことにより、私たちは神の義が喜びとなり、感謝いたします。

あなたのこの義が即ちキリストでありました。キリストを戴き、私たちが義とせられ、キリストという義が、霊核の如くに、私たちの中に小さき芥種一粒となって形成され、義なるキリストが、私たちの中に立ちつつ、私たちの霊魂を救い上げ、存在を推進せしめ給う、このご恩寵を御霊のキリストならばこそ、感謝であります。

神様、いよいよ、信即行、信行一相の事態を誤魔化しなく、突っ込んでいき、そして、倒れても躓いても転んでも滑っても、ただこの信の驚くべき力によって、進ましめられます。感謝いたします。

お父様！　私たちの実存が如何に惨憺たるものであっても、それに気落ちすることなく、いよいよキリストを着、キリストを宿し奉りまして、進んで参ります。かかるが故に、本当に勇気が湧きます。本当に喜び、歓喜が湧きます。パウロと偕に、

「このキリストの愛、生命から我らを離れしむるものは天上天下何処（いずこ）にあるか」

と言うことができます。

お父様、この兄弟姉妹たちの中に、今、光り輝き、また、愛の生命として漲（みなぎ）り、生命の力として来たり給う主のゆえに、心から高らかに聖名を讃美し奉ります。どうか、この兄弟姉妹たちが、いよいよ毎日ペンテコステを迎えつつ、ペンテコステに向かって行くことができますように願い奉ります。復活節からペンテコステの間、斯くご恩寵を戴きつつ進んでいくことを感謝いたします。

どうか、来たるべき6月9日のペンテコステも、その意味において深く祈り、実存をまた祈りとなし、進んでいくことができますように願い奉ります。

今日、新しく来られた兄弟姉妹たち、神様、感謝であります。どうか、いよいよ暫くの

時を祝福し、それぞれ貴神（あなた）の善き、キリストのご恩寵にあずかり、ともどもに展開また展開していらっしゃるようにお願いいたします。

今、心からの感謝と願い、聖名により捧げ奉ります。アーメン。

……

昔在まし、今在まし、のち必ず来たり給う、真の愛のお父様。

何はさておき、はせ参じてまいりましたところの兄弟姉妹たちの中に主イエス・キリストの御生命（おん）、その愛、その義を今日また新たに吸収され、食せられ、血となり肉となり、感謝であります。

我々の生命は観念されるべきものにあらず、

「我は生命のパンなり、わが血を飲み、わが肉を食らえ」

とのキリストの霊の事態を、この使徒たちと同じ歓喜をもって進みつつあることを、神様、感謝いたします。

いよいよ貴神（あなた）の前に、キリストの前にぶっつぶれ、貴神が道となり、恩寵となり、進ましめてくださることを願い奉ります。遠くにある小諸、また小海線の兄弟姉妹たち、今日もまた喜び勇んで進ましめてください。また木曽の杉山君のお母さんの群、また岐阜の療養所の人たち、また東療のたくさんの兄弟姉妹たち、また福島の療養所の連中、何処においてもただキリストであります。

神様、どうかこの聖書を本当に第一の糧としていつわりなく、進んでいくことができますように願い奉ります。

斯くして貴神がこの全世界に、私たちの知ると知らざるとにかかわらず、まことのエクレシヤを展開し、この20世紀後半の危機に向かって、どうか、キリスト者たちが真に防波堤となることができますように願い奉ります。今、重大な時です。私たちの信仰の事態は単に個人的なことでなく、真に歴史的使命を荷っております。どうか、その意味において、真の福音に眼開かれたる者たちはこの自覚のもとに、それぞれ戦い抜いていくことができますように願い奉ります。

また、キリストの十字架に十字架され、また十字架に負われつつ、十字架を負っていくことができますように願い奉ります。

愛する、目の不自由な二人の姉妹、神様、どうか貴神のキリストの光がこの中に充満し、キリストの光が、見ゆると見えぬとにかかわず、これを展開せしめ、また、よく面倒みてくれる松原君の中に同じく祝福が展開しつつあることを感謝いたします。どうか、このようにして、イエス・キリストの光を目の見えない方が真に身に体し、ご恩寵が現象し給わんことを切に願い奉ります。

今、心からの感謝と願い、聖名により捧げ奉ります。アーメン。